

## 臨床報告

## 至誠会第二病院における糖尿病専門外来の治療状況に関する報告

東京女子医科大学 糖尿病センター (所長: 平田幸正教授)

オオガワラヒサコ ウジハラノリコ  
大河原久子・宇治原典子

至誠会第二病院

ミカミ ミワ ノムラ ヨシコ  
三神 美和・野村 淑子

(受付 昭和62年4月13日)

## はじめに

昭和57年10月に至誠会第二病院に糖尿病専門外来が開設されてはやくも4年6カ月が過ぎようとしている<sup>1)2)</sup>。そこで私達は糖尿病専門外来を訪れている患者の治療状況を把握するために少なくとも3年間以上の通院可能であった患者を無作為に選び、性・年齢・肥満度・血糖値の変動およびヘモグロビンA<sub>1c</sub> (以下HbA<sub>1c</sub>)等にチェックポイントを置き、糖尿病管理状況につき若干の考察を加えたので報告する。

## 対象と観察

対象は至誠会第二病院・糖尿病専門外来を昭和62年1月から3月までに再来受診した患者のなかから、3年から4年3カ月通院可能であった者とした。

糖尿病外来での管理状況を知る上で、再来受診患者の性別・年齢・推定罹病期間・常用食事負荷試験等の血糖の変動・HbA<sub>1c</sub>・肥満度 (body mass index: BMI, 体重 kg/身長 m<sup>2</sup>)を測定し、合併症の有無および治療法との関係を検討した。

## 結果

## 1. 再来受診患者における性別・年齢別構成

表1は、昭和62年1月から3月までに糖尿病専門外来を受診した患者の中から、3年間以上通院可能であった者を対象として選び、その性別・年齢および罹病期間等を示したものである。

表1 至誠会第二病院糖尿病外来における3年以上の継続受診患者の性・年齢および推定罹病期間別分類

性	年齢(歳)	推定罹病期間(年)			計(%)
		<5≤	<10≤		
男	<50	4	2	1	7(12.1)
	50≤ <70	4	3	7	14(24.1)
	70≤		2	2	4(6.9)
女	<50		2		2(3.5)
	50≤ <70	2	6	10	18(31.0)
	70≤	3	3	7	13(22.4)
計(%)		13(22.4)	18(31.0)	27(46.6)	58(100)

男が25名で、女は33名であった。年齢別にみると男女共に50歳から70歳未満のものが多く、男は全体の24%、女は31%であり男女別では男の25名中15名(56%)、女の33名中18名(54%)であった。罹病期間は10年以上が全体の半数近くを占めていた。

## 2. 再来受診者患者における治療別分類

治療別にみると、男女共に初診時よりすでに経口血糖降下剤を服用しているものが多く、男ではその48%に、女では69%が経口剤を服用していた。しかし、3年間の糖尿病外来受診期間中、男では12名中4名が血糖降下剤から食事療法となり、1名がインスリン療法となった。女では23名中3名が経口剤から食事療法へ、5名がインスリン治療となった。さらに詳細にそのうちわけをみると、

Hisako OHGAWARA, Noriko UZIHARA [Diabetes Center, Tokyo Women's Medical College] Miwa MIKAMI, Yoshiko NOMURA [Second Hospital of Shiseikai]: Report on current aspects of diabetic treatment at the Diabetic Clinic Shiseikai Hospital

表2 治療別分類

治療	男		女	
	初診 (S. 57.10~ S. 59.1)	現在 (S. 62.1~ S. 62.3)	初診 (S. 57.10~ S. 59.1)	現在 (S. 62.1~ S. 62.3)
食 事	6 (24.0)	10 (40.0)	4 (12.1)	7 (21.2)
経 口 剤	12 (48.0)	7 (28.0)	23 (69.7)	15 (45.5)
インスリン	7 (28.0)	8 (32.0)	6 (18.2)	11 (33.3)
計 (%)	25 (100)	25 (100)	33 (100)	33 (100)

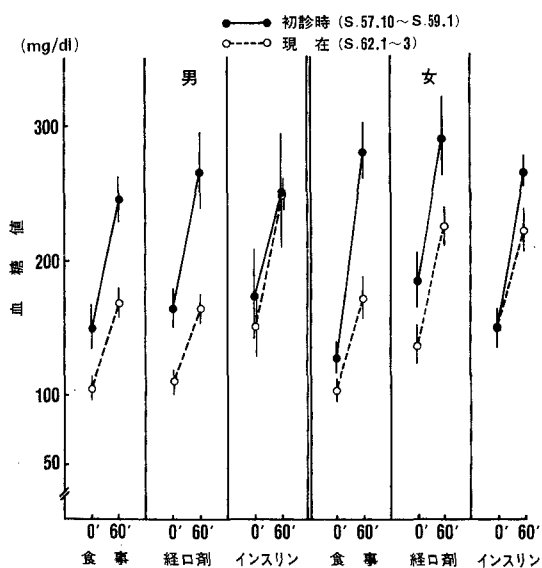


図1 糖尿病管理の効果判定 (I)  
常用食事負荷前後の血糖値の変動 (Mean±SD)

男における血糖降下剤服用者の7名中3名は服用量が少なくなり、2名が不変、他の2名は服用量が増し、女では15名中2名が量の減少、6名が不変で、残りの7名は服用量が増した。インスリン治療者では、男の8名中2名が注射量の減少、6名が増加、女では11名中3名が減少、8名が量の増加をみた。すなわち男女共に食事療法または経口剤治療患者では改善の傾向を示したが、インスリン治療者においてはむしろ悪化の傾向を示した(表2)。

### 3. 糖尿病管理の効果判定：常用食事負荷前後の血糖値の変動

治療の効果を判定する一つのチェックポイント

表3 糖尿病管理の効果判定 (II)  
治療別にみたHbA<sub>1c</sub> (%)

治療	性別	
	男	女
食 事	6.4±0.89	6.7±1.51
経 口 剤	7.4±1.69	8.1±1.42
インスリン	7.6±2.19	8.3±1.64

として、常用食事負荷試験前後における血糖値の変動がある。図1は同一患者において初診時および現在と2回常用食事負荷試験を施行し、食前および食後1時間の血糖値の変動を観察した。

食事療法および経口剤治療を受けている者は食前の血糖値と食後の過血糖が共に改善を示した( $p < 0.05$ )が、インスリン治療患者では男は食前の血糖値がわずかに低下の傾向を示したが、推計学的に差はなかった。女では食前血糖は変らなかったが、食後1時間値の過血糖に差がみられた( $p < 0.05$ )。

### 4. 効果判定：HbA<sub>1c</sub>

糖尿病の代謝状態を把握する一つ的手段としてHbA<sub>1c</sub>がある。表3は治療別にみた男女間におけるHbA<sub>1c</sub>の平均値を示したものである。食事療法を受けている者では男は6.4±0.89、女は6.7±2.19で、経口剤治療群では男は7.4±1.69、女は8.1±1.42を示し、インスリン治療では男は7.6±2.19、女が8.3±1.64と男に比べ女に高い傾向を示した。

### 5. 効果判定：BMI

表4は治療別にみた体重の変化をBMIで表わ

表4 糖尿病管理の効果判定 (III)  
体重の変化 (BMI: 体重 kg ÷ 身長 m<sup>2</sup>)

性別 治療	男		女	
	初診 (S.57.10~ S.59.1)	現在 (S.62.1~ S.62.3)	初診 (S.57.10~ S.59.1)	現在 (S.62.1~ S.62.3)
食事	22.03±3.49	22.06±2.64	23.11±2.90	23.19±2.25
経口剤	21.89±2.83	22.14±3.59	22.07±3.14	22.78±2.30
インスリン	23.47±3.55	24.43±3.20	22.14±4.61	22.38±3.26

したものである。3年間の外来通院における治療別観察では、BMIには推計学的差をみなかった。

6. 効果判定：合併症、殊に網膜症の変化について

糖尿病の三大合併症である網膜症は、疾病の進展をみる大きな指標となる。

男25名、女33名の糖尿病外来受診患者のうち初診時すでに網膜症を合併しているものは男で8名、女では11名であり全例が非増殖性網膜症であった。3年後には男は9名、女では19名に増加し、殊に増殖性網膜症となったものが男で4名、女で3名であった。

尚、腎機能および神経所見で顕著な変化を来したものは男女共に1例もみられなかった。

#### 考 察

至誠会第二病院糖尿病専門外来における3年間の管理状況を観察した。患者の年齢構成が50歳以上の女性の高齢者に多いのは、地域の基幹病院の特色といえよう。また罹病期間が5年から10年以上に多く、初診時すでに経口剤またはインスリン治療を受けているものが男女共に全体の60%以上を占めている。その大多数の患者は一般内科外来ですでに管理を受けていた。しかしそれにも拘らず初診時の食前血糖値が150mg/dl~200mg/dl、食後1時間値が250mg/dl~300mg/dlであった事は、糖尿病患者への食事および運動療法の教育が不十分であったように思われる。糖尿病専門外来での管理を受けた後の常用食事負荷試験では食前の血糖値が100mg/dl~150mg/dlに、食後1時間

値が150mg/dl~200mg/dl内にコントロールされて来たのは明らかに患者教育（食事および運動を含む）の必要性を示している。

近年、バイオテクノロジーの著しい発展からインスリン治療が一般に広く用いられるようになったことは、表2でみるように高齢男女の約30%の人達がインスリン治療を受けていることでも明らかである。しかしBMIのわずかな動きや常用食事負荷前後の血糖の変動でも明らかのように、インスリンにたより過ぎて食事や運動療法がややもするとおろそかになり易い傾向があることは注意すべき点である。如何なる糖尿病の治療を受けるにせよ、その根本には食事による体重のコントロールがある。このことは慢性疾患を持つ患者や医師が忘れてはならないことを強調したい。

#### ま と め

以上、至誠会第二病院専門外来の治療状況を把握することにより、糖尿病という慢性疾患における患者教育の重要性をかんがみ、専門外来の開設が患者にとって意義のあることと思われる。

稿を終えるにあたり、患者教育に多大な熱意で協力下さった亀崎栄養士、外来看護婦の大林・伊藤両氏に感謝いたします。

#### 文 献

- 1) 高橋千恵子, 木村敬子: 至誠会第二病院における糖尿病専門外来開設半年後の現状. 東女医大誌 53: 1157-1170, 1983
- 2) 三原俊彦, 平田幸正: 断面調査による糖尿病患者1629名の臨床像. 糖尿病 21: 965-973, 1978